327
912

鄉土先賢列傳

始

鄉土先賢列傳

327-912

鄉土先賢紀功碑

大正
5. 12.26
贈寄

〃 會 寄贈本

議院議長正二位勳一等公爵德川家達篆額

外貿易　末永平藏
後藤本顯宗
船定印
高木作右衛門
荒木宗太郎

儒

學　青木永章
中島廣足

蘭

學　西木學
吉雄幸左衛門
志筑永
中忠德雄
末武忠
山
宮馬久三郎

贈正五位

敬順作三助榮

榮久

砲術儒學

航海術　山本晴海

活版術　竹內貞基

贈從五位寫眞術　內昌造

上野彥馬

渡邊喜代多

木下逸雲

神善清

釋善俗

法善智

士平

松

倉田牛込忠次郎右衛門

益

公

慈

敬

弘

烈

美

儒學支那語　彭城宣道榮義

儒學史學　松浦東溪

史學地理學　小林謙見貞

天文學　北川謙如信

本草學　福山德潤

儒學本草學　崎道意喜

杉本忠甫

栗崎道入德逕

西川支松

北山

儒學向井元升

儒學支那語　林島冠山

蘭學英佛語　吉木檜之助榮

蘭學英語　林雄木高橋正美

蘭學露語　森山

蘭學英語　馬場

支那語　鄭滿州幹

砲術　大高木寺右衛門孫八郎

贈從五位　中島名左衛門太夫

贈正五位　高木四郎

贈從五位　大江井

贈從五位　向井

贈從五位　伊藤

贈從五位　青木

贈從五位　近藤

贈從五位　林

贈從五位　北山

贈從五位　林新吾兵衛

贈從五位　宗建

贈從五位　光建

贈從五位　輔彥

贈從五位　宏隆

贈從五位　永來弘

贈從五位　烈

外國人

清國　伊太利　アリニヤニ　Alexander Valignuni

清國　和蘭　ブロムホフ　Ian Cock Blomhoff

清國　獨逸　ケンペル　Engeblert Kaembber

明國　獨逸　シーボルト　Philipp Franz von Siebold

明國　瑞典　ツンベルグ　Karl Peter Theunberg

明國　和蘭　モーニツキ　Mohnike

明國　和蘭　チチングー　Isaak Titsingh

明國　和蘭　ポンペ　I.L.C. Pompe van Meerdervoort

明國　和蘭　ドーフ　Hendrik Doeff

明國　和蘭　フルベツキ　Guido Fridolin Verbeck

明國　獨逸　ケンペル　Engeblert Kaembber

明國　獨逸　シーボルト　Philipp Franz von Siebold

明國　獨逸　ツンベルグ　Karl Peter Theunberg

明國　獨逸　モーニツキ　Mohnike

明國　獨逸　チチングー　Isaak Titsingh

明國　獨逸　ポンペ　I.L.C. Pompe van Meerdervoort

明國　獨逸　ドーフ　Hendrik Doeff

明國　獨逸　フルベツキ　Guido Fridolin Verbeck

清國　伊藤博文

清國　宋秦漢

清國　沈壽

清國　沈成

清國　陳帝

清國　伊藤

清國　千葉

清國　范

清國　即

清國　水

清國　逸

清國　獨

清國　隱

清國　紫

清國　南

清國　樂

清國　振

清國　孚

清國　道

清國　岩

清國　蘋

清國　光

清國　九

清國　默

清國　生

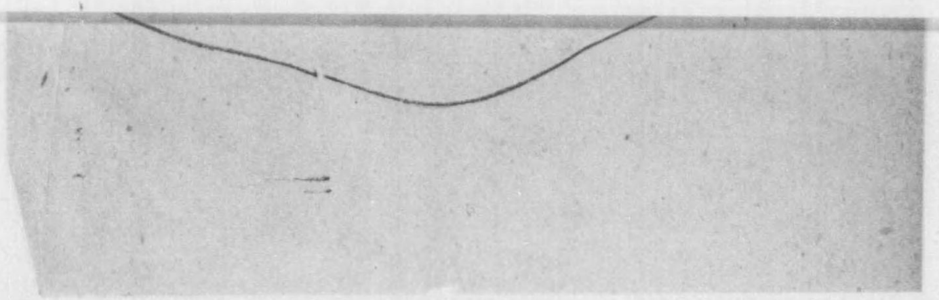
清國　非

清國　菴

清國　然

清國　立

清國　元



郷土先賢紀功碑

貴族院議長正二位勳一等公爵德川家達篆額

海外貿易
末次平藏
船本顯定
後藤宗印
高木作右衛門
荒木宗太郎

遠征勇武
津田又左衛門
贈従五位 濱田彌兵衛

探險
島谷市左衛門

醫學儒學本草學
贈正五位 向井元升

醫學
栗崎道喜
杉本忠意
西玄甫
西松遥
潁川入徳
北山道長
贈正五位 楢林新五兵衛
贈正五位 楢林宗建

國文學
青木永弘
向井去來
大江宏隆
伊奈建彦
近藤光輔
青木永章
中島廣足

儒學
北島雪山
南部草壽
高玄岱
向井元成
南部南山
中野撝謙
盧草拙
長川東洲

儒學支那語
彭城宣義
林道榮
岡島冠山

儒學史學
松浦東溪
饒田謙藏

史學
田邊茂啓

天文地理學
小林謙貞
西川如見
北島見信

本草學
盧草碩
福山德潤

蘭學
本木榮久
西善三郎
贈正五位 吉雄幸左衛門
本木良永
志筑忠雄
中山武德
末次忠助
美馬順三
二宮敬作

蘭學英佛語
本木正榮
吉雄權之助
楢林高美

蘭學英語
森山多吉郎
堀達之助

蘭學露語
馬場貞由

支那語滿州語
鄭幹輔

砲術
贈従五位 藥師寺宇右衛門
阪本孫八
大木藤十郎
贈正四位 高島四郎太夫
贈正五位 中島名左衛門

砲術儒學
山本晴海

航海術
竹內貞基

活版術
贈従五位 本木昌造

寫眞術
上野彦馬

美術
喜多元規
渡邊秀石
神代繡江
釋鐵翁
木下逸雲

公益
牛込忠左衛門
倉田次郎右衛門

慈善
園山善爾

敬神
青木賢清

弘法
釋道智

烈士
松平圖書頭

外國人
明國 隱元
明國 獨立
明國 逸然
明國 木庵
明國 即非
明國 范道生
清國 千獃
清國 伊孚九
清國 陳振先
清國 沈獎菴
清國 沈南蘋
清國 宋紫岩

伊太利 ワリニヤニ Alexander Valignuni
和蘭 ブロムホフ Ian Cock Blomhoff
獨逸 ケンペル Engeblert Kaembber
獨逸 シーボルト Philipp Franz non Siebold
瑞典 ツンベルグ Karl Peter Theunberg
和蘭 モーニツキ Mohnike
和蘭 チチング Isaak Titsingh
和蘭 ポンペイ I.L.C, Pompe van Meer-dervoort
和蘭 ドーフ Hendrik Doeff
和蘭 フルベツキ Guido Fridolin Verbeck

碑石

御即位大禮奉祝記念 郷土先賢紀功碑建設概要

○起工　大正四年十一月七日
○建設地　長崎市諏訪公園
○碑石　天然根府川石高一丈二尺幅五尺五寸厚九寸總高二丈六尺
○臺石　西彼杵郡上長崎村天然石高二尺八寸幅七尺五寸重量約二萬斤
○基礎　下臺石垣地下三尺混凝土芝生圓形土坡築造上部周圍ニハ鋲鎖ヲ繞ラシ前面ニハ花崗石ヲ以テ上段下段石階三十二段ヲ附ス
○篆額　貴族院議長正二位勲一等公爵德川家達
○書者　漢字長崎加悦長洋字長崎古賀十二郎
○石工　碑石大阪平清基礎工事長崎古川耕造
○竣工　大正五年七月二十七日
○工費　壹千五百四拾壹圓參拾四錢五厘
○建設者　長崎市小學校職員會發起長崎市内有志者賛助

例言

一本書ハ大正四年十一月御即位大禮奉祝記念ノ爲メ曩ニ本會ガ市内有志ノ賛助ヲ得テ本市諏訪公園内ニ建設セル郷土先賢紀功碑ニ勒シタル我ガ郷土先賢ノ傳記ヲ調査編纂セルモノナリ

一郷土先賢紀功碑ニ勒セルモノハ海外貿易五名遠征勇武二名探險一名醫學儒學本草學一名醫學八名國文學六名儒學八名儒學支那語三名儒學史學二名史學一名天文地理學三名本草學二名蘭學九名蘭學英佛語三名蘭學英語二名蘭學露語一名支那語滿洲語一名砲術五名砲術儒學一名航海術一名活版術一名寫眞術一名美術五名公益二名慈善一名敬神一名弘法一名烈士一名計七十九名ニシテ尚ホ特ニ往年我ガ長崎ニ在留セル外國人ニシテ本邦文化ノ啓發ニ貢献セル事蹟最モ顯著ナルモノ二十二名ヲ別欄ニ勒セリ

一碑面ニ勒セル郷土先賢ハ主トシテ長崎開港以來明治維新ニ至ル期間ニ於テ事蹟ノ最モ顯著ナル代表的人士ニシテ尚ホ他ニ郷土開基又ハ醫術學術工藝通商貿易公益其他事功ノ錄スベキモノ尠カラズト雖モ或ハ史實ノ考証猶ホ未タ全カラサルモノアリ或ハ年所ヲ經ルコト未タ久シカラズ人物閲歴事業ノ効果影響等更ニ愼重ノ調査ヲ遂クルノ必要ヲ認ムルモノアリ是等ハ孰レモ姑ク碑面ニ勒セサルコトヽセリ

一此ノ列傳ハ專ラ調査委員ノ報告ニ基キ更ニ約十ケ月間內外文書又ハ事實ニ就キ愼重ナル考證研究ヲ經タルモノニシテ往々從來傳記ノ誤謬ヲ正シ又學術上積年ノ疑問ヲ解決セルモノナキニアラズ特ニ史實ヲ未タ湮滅セザルニ及ンデ收拾シ尙ホ新ニ人物ヲ地下ニ起シテ其ノ事績ヲ紹介セルモノアルガ如キ偏ニ我ガ昭代ノ賜ナリ

一傳記ニシテ繁簡精粗自ラ記述ノ統一セザルモノアルハ主トシテ事蹟又ハ材料ノ異同アルニ因ルト雖モ從來坊間傳記ノ正確ニ傳ハルモノハ割合ニ之ヲ抄略シ又傳記ノ誤謬ヲ正シ若クハ新ニ史實ヲ紹介セルモノハ成ルベク詳細ニ之ヲ叙述センコトヲ努メタリ

一鄕土先賢ノ姓名ヲ勒スルニハ贈位者ハ專ラ通稱ヲ記シ其他ハ諱、字、號等必ズシモ之ヲ一定セス要ハ成ルヘク世ニ知ラレ又ハ多ク常用セラル、呼稱ヲ以テ其ノ事蹟ヲ顯彰センコトヲ期シタリ尙ホ同一ノ人ニシテ種々ノ名稱ヲ以テ世ニ傳ヘラル、モノ、如キハ其ノ異名同人タルコトヲ紹介スル爲メ力メテ別名又ハ異說ヲモ附記シテ參考ニ資セリ

一鄕土先賢ノ事歷調査ト與ニ成ルヘク遺族又ハ墳墓ノ所在等モ之ヲ紹介センコトヲ努メタルモ事容易ナラス終ニ及ハサルモノアリ姑ク他日ノ考証ヲ待ツ

大正五年八月天長節

長崎市小學校職員會

鄕土先賢列傳

目次

海外貿易……一
末次平藏
船本顯定
後藤宗印
高木作右衛門
荒木宗太郎
遠征勇武……三
贈從五位 津田又左衛門
濱田彌兵衛
探險……四
島谷市左衛門
醫學儒學本草學……五
贈正五位 向井元升

醫學……五

栗崎道喜
杉本忠意
西玄甫
西松逕
穎川入德
北山道長
贈正五位 檜林新吾兵衛
贈正五位 檜林宗建

國文學……八

青木永弘
向井去來
大江宏隆
伊奈建彦
近藤光輔
青木永章
中島廣足

儒學……一〇

北島雪山
南部草壽
高玄岱
向井元成
南部南山
中野撝謙
盧草拙
長川東洲

儒學支那語……一三

彭城宣義
林道榮
岡島冠山

儒學史學……一四

松浦東溪
饒田謙藏

史學……一五

田邊茂啓

天文地理學……一六
小林謙貞
西川如見
北島見信

本草學……一七
盧草碩
福山德潤

蘭學……一八
本木榮久
西善三郎
贈正五位 吉雄幸左衛門
本木良永
志筑忠雄
中山武德
末永忠助
美馬順三
二宮敬作

蘭學英佛語……二三
本木正榮
吉雄權之助
楢林高美

蘭學英語……二三
森山多吉郎
堀達之助

蘭學露語……二四
馬場貞由

支那語滿洲語……二五
鄭幹輔

砲術……二五
藥師寺宇右衛門
贈從五位 阪本孫八
大木藤十郎
贈正四位 高島四郎太夫
贈正五位 中島名左衛門

砲術儒學……山本晴海……二八

航海術……竹内貞基……二八

活版術……贈從五位 本木昌造……二九

寫眞術……上野彦馬……三〇

美術……喜多元規 渡邊秀石 神代繍江 釋鐵翁 木下逸雲……三〇

公益……牛込忠左衛門 倉田次郎右衛門……三一

慈善……園山善爾……三二

敬神……青木賢清……三三

弘法……釋道智……三三

烈士……松平圖書頭……三四

外國人……三五

明國隱元

獨立明國

逸然明國

菴木明國

非即明國

生道范明國

獸千明國

孚九伊清國

清國　陳振先
清國　沈燮菴
清國　沈南蘋
清國　朱柴岩
伊太利　ワリニヤニ
獨逸　ケンペル
瑞典　ツンベルグ
和蘭　チチンク
和蘭　ドーフ
和蘭　ブロムホフ
獨逸　シーボルト
和蘭　モーニツキ
和蘭　ポンペ
和蘭　フルベツキ

鄉土先賢列傳

海外貿易

末次平藏

諱は政直其の先は筑前の人なり元和初年村山等安を承けて長崎代官となり長崎奉行を輔けて外交貿易の事務に關與す夙に海外貿易に心を潛め安南地方と交易をなし富王侯を凌ぐに至る

船本顯定

通稱彌七郎又一に彌七と稱す柬甫寨（カンボヂヤ）、安南等へ渡航交易を爲す慶長九年德川家康特に顯定に安南大都統瑞國公に贈るべき文書方物を託す大都統瑞國公特に顯定に義子の待遇を與へしが如き以て其の彼我の間に重んぜられし一斑を知るに足る慶長元和の頃安南地方に來往すること前後三十年或は安南國の爲めに在留邦人を鎭撫し或は家康の委囑に依り其の制札を受けて安南渡航の邦人を督し我國の商權を擴張しつゝ力めて外交上の葛藤を避けんことに苦心せり

後藤宗印

諱は貞之通稱惣太郎後庄左衛門と改む更に剃髮して宗印と稱す肥前國杵島郡領主後藤中務大輔貞明の

子なり永祿年間長崎に來り頭人となる（一說に山城國京都の人なりと）後頭人の稱廢せらるゝに及び更に町年寄となる文祿元年頭人總代として肥前の名護屋に至り秀吉に謁す其の際長崎支配に辛勞せるの功を賞せられ特に猩々緋の陣羽織を賜ふ慶長年間御朱印狀を受けて芸文萊（ボルネオ）、柬甫寨（カンボヂヤ）、暹羅（シヤム）等と交易をなす子孫世々町年寄となりて明治維新に至る

高木作右衛門

諱は忠次町年寄なり元和中摩陸國（摩陸國はマラッカにあらずしてボルネオ島の一部なりとの說あり記して他日の考證に待つ）と交易を爲す後末次平藏と與に土地の吉利支丹宗徒を諭して佛敎に轉せしむ功を以て時服及銀を賜ふ寛永年間天草島原吉利支丹宗徒一揆蜂起の際長崎の警備に盡力したる功に依り江戸に於て將軍に謁し厚く賞せらる子孫二家に分れ一家は長崎代官として一家は町年寄として幕末に至るまで孰れも長崎の爲めに盡せる功甚だ多し

荒木宗太郎

後惣右衛門と改む末次平藏と與に海外貿易に從事す嘗て安南に到る瑞國公玩氏其の女を納れて宗太郎に娶はす後海外渡航を禁せらるゝに至り築町乙名として此の地に歿す子孫相繼きて明治維新に至る

遠征勇武

津田又左衛門

海外飛躍の壯圖を抱いて暹羅に至る適々國難に會す山田長政と與に在留日本人を率ゐて國王を救ふ功を以て王女を配せらる後長崎に歸り材木町乙名となり當地に歿す

贈從五位 濱田彌兵衛

諱は重武其の先は石州濱田城主なり任俠義を好み頗る氣慨に富む蘭人今の臺灣島安平の地に商館を置き支那貿易の根據地として其の利益を壟斷し又ゼランデヤ城を築きて防禦に備へ尙は灣を隔てゝ相對したるサカム即ち今の臺南の地に寨を設け船舶に對し關稅を課し入國者より人頭稅を課する等專横を極め該島に來往せる邦人と在島蘭人との葛藤頻々として絕ゆる時なし寛永四年臺灣長官ピーテル、ノイツは日本人の渡海を禁し其の禍根を除かんと欲し自ら江戸に到りて將軍秀忠に謁し協商する所あらんとせしも將軍は其の引見を許さゝりしを以てノイツは空しく臺灣に歸還せり彌兵衛は豫て蘭人の爲め臺灣に於て屢ば邦人の迫害せられ常に我が國威の振はざるを慨し竊に報復の志あり同年臺灣土人十六人を伴ひ長崎に歸り代官末次平藏と謀りて將軍秀忠に謁せしめ臺灣入貢の實を擧げんとす是より先き慶元の間有馬晴信村山等安等家康の命を奉して臺灣懷柔の策を講せしも成らず是に於て將軍は特に

蕃人に破格の優遇を賜ふ土人一行再び長崎に至り彌兵衛と與に翌年臺灣に歸るノイツ大に彌兵衛を恨み其の船二隻を拘禁し土人を禁獄し虐待至らざるなし彌兵衛同志と與にノイツに會見し歸帆の許可を求む其の終に之を諾せざるを認むるや虚に乘じて之を捕へ悉く我が要求に應せしめ人質を得て歸朝す（一説に天野屋太郎左衛門も此の一行に在りて功勞ありしと）斯くて彌兵衛等長崎に歸りて蘭人の專横を訴へしかば幕府大に之を憤りて平戸入港中の蘭船の出帆を禁し且和蘭商館の貿易を停止せしめ又長崎代官末次平藏をして臺灣城塞の破壞をも要求せしむるに至れり此の葛藤は寛永十三年に至りて僅に解決を告げしが是より我が國威大に海外に發揚し彌兵衛の聲名勇武も亦内外に喧傳せり大正四年十一月從五位を追贈せらる

探　險

島谷市左衛門

天文地理の學に通じ又航海造船の術に精し寛文九年代官末次平藏幕命に依り村山庄兵衛堀八右衛門大串安左衛門等と與に御用唐船作事方を市左衛門に委囑す工成るに及び江戸南部等に航す延寶三年再び幕命を奉し一子太郎左衛門及び中尾庄左衛門等と與に小笠原島を探險して歸る小笠原島の領有茲に至りて確定す

醫學儒學本草學

贈正五位　向井元升

名は玄松字は素柏晩年名を元升字を以順と改め自ら觀水子と號し堂を蘭蘭堂と稱す肥前神埼の人なり儒學に精通し本草學及び天文學に精しく殊に診療を以て醫神の稱あり正保四年官に請うて立山に聖廟を創設し且私塾輔仁堂を東山下に設け儒學を唱導す是に於て儒學大に勃興す萬治元年五十歳妻子を携へて京師に入り家居す爾後其の術益行はる八條金剛壽院宮病篤く衆醫術窮まるや後水尾太上皇の詔に依り献藥して病を治す太上皇大に叡感あらせられ寵賜優渥時人以て異數の榮と爲す乾坤鐃說、庖厨備用、和名本草（十三卷）廣求經驗秘方、知耻編等の著あり大正四年十一月正五位を追贈せらる

醫　學

栗崎道喜

少時蠻國に渡り稍長して醫術を修め特に金瘡の術に長す歸朝後益和漢南蠻三國の醫術藥方等を詳考し聲譽海内に遍ねし栗崎流茲に起る

杉本忠意

名は一に忠惠として傳へらる南蠻流瘍科を以て聲名一世を蓋ふ寛文の初召されて江戸に至り醫官に擧げられ法眼に叙せらる幕末に至るまで子孫相繼ぎ醫を以て幕府に仕ふ

西玄甫

通稱吉兵衛南蠻語を能くし阿蘭陀語に通ず大通詞となる又西洋醫術に精し後幕府醫官に任し法眼に叙せらる實に西流の祖なり寛文九年外國の物産品類を蒐錄して一書を著はす諸國土産書是なり

西松逕

諱は盛、壽仙菴と號す松逕は其の字なり醫術を能くす長崎御用醫師に任ず貞享三年京に入り公卿諸家の難症を治し靈元院太上皇の叡慮に副ひ法橋に任せられ尋て元祿三年再び京に入り東山院太上皇の勅命により法眼となり、名聲遠近に馳す

顯川入德

唐性陳氏名は明德字は完成明國杭州の人なり本邦歸化の後姓名を改めて顯川入德と稱す醫術を究め殊に小兒科に精しく治効神の如し崎陽漢醫方是より一新す安東省庵等と親善なり心醫錄の著あり

北山道長

唐姓馬氏友松と號す父榮宇明國の亂を避けて長崎に居る道少長にして明僧化林、獨立等に就き醫を修め發明する所多し長じて普く四方に遊び遂に大坂に留りて門戸を張る治効神の如く門前市をなす侯伯禮を厚うして聘すれども應せず治療の傍古今東西の方書を訂正し以て後進の惑なからしむ衆方規矩、名醫方考繩愆、增廣口訣等の著あり

贈正五位 楢林新吾兵衛

諱は時敏鎭山と號す後剃髮して榮休と稱す寛文五年十八歲にして阿蘭陀小通詞に拔擢せられ貞享二年大通詞に昇進す夙に心を醫學の研究に潛め舶來の醫書を熟讀す嘗てアンブロシウンス、バアレの外科書を得て稗益する所少からず來舶紅毛人中醫學に造詣深きクレイア、ブツシ、ホツフマン、ケンペル等の指敎を受け蘭醫の攻究に於て大に得る所あり本邦に於ける泰西醫術に一新生面を與ふ紅夷外科宗傳等の著あり楢林流茲に起る大正四年十一月正五位を追贈せらる

贈正五位 楢林宗健

諱は高房字は潛和山と號す出島及唐人屋敷掛醫にて長崎在住鍋島侯侍醫たりシーボルト來るに及び官に請ひ就て醫學を學び後蘭舘醫モーニツキ來舶するに及び益を請ひて種痘術の研究上大に得る所あり弘化末年閑叟の命に依り痘苗を和蘭國に求め嘉永二年其の到着後先づ之を其の子に試み次第に遠近に傳種す種痘術是より我國に起る牛痘小考の著あり明治三十一年十月正五位を追贈せらる

國文學

青木永弘

諏訪神社宮司青木氏の一族なり幼にして學を好み皇學を以て名あり長じて四方を歷遊し足跡海内に遍ねし卜部卿其の器を愛し寵遇日に厚し主計頭に任じ正六位に叙せらる東山天皇屢召して神代卷を講せしめらる諏訪神社に奉掲せる「神の勅額」は永弘に賜ふ所なり六根清淨松風抄の著あり

向井去來

名は兼時字は元淵通稱平次郎義焉子と號す向井元升の二男なり夙に儒學を修め天文を學び武道に達す父元升に從つて京師に在り粟田口の宮に仕へ傍ら芭蕉に師事して俳諧を學び其角嵐雪等と相馳驅し關左の棟梁を以て稱せらる崎陽俳道茲に起る

大江宏隆

字は意敬操軒と號す幼より讀書を好み最も心を本邦典故に潜め長じて四方を歷遊し終に風早黄門に就き國雅典故を學び造詣深し又繪事を能くす薩摩に遊ぶこと十五年後長崎に歸り道觀を田上に構へ眞武廟を建て修煉を事とす神令鈔等の著あり

伊奈建彦

松森神社祠官なり石見守に任じ從五位下に叙す長じて本居宣長に就て國學を修む和歌に巧に國典に精通す人と爲り剛直常に皇道の衰微を歎じ斯道を以て終始す長崎に於ける國文學に寄與する所少からず櫻園日抄、淡曾能梯建等の著あり

近藤光輔

通稱半五郎夜雨菴と號す本居宣長加藤千蔭本居丈平香川景樹等の諸大家に益を請ひ夙に和歌を以て鳴る中島廣足の長崎に來りし際には既に陰然一家を爲せり翁吟咏口を衝て出づ其の詠歌實に萬餘章に上る夜雨菴の如き僅に其の一部に過ぎず短歌に於ては長崎三歌人中隨一と稱せらる又漢籍に精しく雅樂に通せり

青木永章

玉園と號す京都の人なり青木氏を繼き諏訪神社大宮司に補し從五位上丹波守に任す在職十七年永章詠歌に巧に殊に長歌を能くす近藤光輔中島廣足と併せて長崎三歌人の稱あり

中島廣足

初め春臣と稱し後弘足又廣足と更む檀園又は黄口と號し一に蛙磨等の號あり世々肥後侯細川氏に仕ふ少壯にして同藩長瀨眞幸に就きて國學を修む後江戸に出で越智千里の門に入り和歌文章を學び才學同

門に冠す學成りて長崎に來り帷を下すこと二十年遠近來り學ぶもの多し廣足博學經史に通し國書に渉り特に語格に精しく和歌文章に於ては東都村田春海と相並びて推重せられ本邦國語學界に貢献する所少からず時に好んで畫を作る詞の八衢補遺、雅言集覽補遺、敏鍬、櫨園文集、瓊浦集、不知火考、椿島浪風記、櫨園長歌集、櫨園隨筆、歷木辨其の他著書甚だ多し又和方醫術を能くし疫瘡新論、藥品解、病名解等の著あり

儒學

北島雪山

名は三立、雪山は其の號なり蘭溪蘭陰等の別號あり肥後の人なり細川氏に仕ふ後故ありて綬を解き去つて長崎に來る夙に王陽明の學を修め林春齋木下順菴等と交り才學俱に富贍藏書亦甚だ多し人と爲り洒落狂吟放浪繩墨に拘らず奇行甚だ多し嘗て兪立德に就て文衡山正傳の書法を學び其の祕奥を究む（一說に即非獨立にも學ぶと）細井廣澤其の門に出づ

南部草壽

陸沈軒と號す京都の人なり博學典故に通じ經濟に精し奉行牛込氏立山に聖堂を再興するに方り草壽偶崎陽に遊ぶ牛込氏擧げて塾師と爲し子弟を敎養せしむ長崎の儒學漸く盛なり門下錚々の士多し後富山侯前田氏に聘せらる實に越藩儒學の祖なり著はす所の職原抄支流世に行はる

高玄岱

姓深見唐姓高氏一名元泰通稱新右衛門字は子新又斗膽天猗婺山等の號あり幼より奇才あり岩永知新獨立等に師事し儒學を修め醫術に精しく書法に於ては林道榮と相並びて二妙の稱あり初め醫を以て島津侯に仕へ後幕府の儒員となり新井白石荻生徂徠室鳩巢三宅觀瀾等と友とし善し嘗て京都に在り太上皇養生保命の道を問はせ給ふ玄岱即ち養生篇一卷を草して上つる、

向井元成

名は兼丸、元成は其の字にして又一に叔明の稱あり鳳梧齋と號す、樵夫、懶漁、無爲、禮馬子等の別號あり向井元升の第三子なり南部草壽の後を承け立山聖堂祭酒となり儒學を唱ふ之より子孫相承け以て明治維新に至る貞享二年舶載書籍中に邪敎の文字あることを發見し功を以て書物改役に任ず長崎聖堂を現今の地に移せるは元成の時代なり

南部南山

通稱昌輔諱は景衡字は思聰、南山は其の號なり又一に環翠園の號あり南山、實は小野昌碩の子なり南

部草壽其の才學を愛し養ふて子となす初め安東省菴に學び後木下順庵に從ひ木門の巨擘たり博覽洽聞詩藻を善くし最も史學に長ず嘗て環翠園史論三十卷を著はす蒐羅該博考証精核時人之を珍とす晩年其の詩六百九十四首文四十四篇を撰し八卷となし題して喚起漫草と曰ふ

中野撝謙

諱は繼善通稱善助字は完翁、撝謙は其の號なり、林道榮に師事し句讀及び書法を習ひ七八歳誦讀既に遍く時々道榮に代て四書小學等を講す其の談論殆と老成の人の如し聞者之を奇とす十二三歳にして書を能くす神童の稱あり年十九始て江戸に遊び廣く諸名士に交り經術を好で程朱の學を修む時に篠山侯引見して其の才を奇とし之に俸祿を與へ衣食を給して益々其の業を修めしむ後關宿侯牧野氏辟して書記を掌らしむ時に天和四年なり元祿中將軍綱吉屢關宿侯の邸に臨みて撝謙に進講せしむ人皆之を榮とす是より貴公子就て學ぶもの多し太宰春臺安藤東壁等其の門に出づ

盧草拙

通稱元右衛門字は元敏清素又は葆眞と號す後草拙を以て號と爲す幼にして多病悄然自棄するもの數年宿痾癒ふるに及び研鑽倦ます終に頭角群を拔く潁川雅旭(陳嚴正)大江宏隆岡島冠山と友とし善し冠山草拙を以て唐語譯解第一と爲す蓋し俗語に精しきを以ての故なり正德三年聖堂學頭に任じ後書物改添役となる夙に天文學を修め造詣深し享保三年將軍吉宗西川如見と與に之を江戸に召し下問す名聲一時に高し又道教を好み平居素樸に甘んじ清靜を尙ふ天地一指論、喙嚙錄等の著あり嗣子千里其の遺志を繼きて長崎先民傳を編述す

長川東洲

通稱退藏諱は熙字は元皙竹院と號す東洲は其の別號なり初め長崎聖堂助教たり儒學に精通し佛典に涉る博覽强記父母に仕へて至孝なり歷代奉行屢時務の策を詢ふ勝海舟之を幕府に薦む應せず閑餘學舍に子弟を敎導するもの前後四十年門生貳千人と稱す伊東巳代治福地源一郎何禮之等其の門に出づ續外史餘論、敎義策題、國史論纂評點等著書多し

儒學支那語

彭城宣義

唐姓劉字は耀哲通稱仁左衛門東閣と號す父は明の歸化人なり天資明敏少時神童を以て稱せらる最も支那語を善くし方言土語通曉せざるなし歳十八唐通事に拔擢せらる其の學濂洛を主とす而も之を固執せず朱舜水隱元獨立等に敬重せられ名聲天下に布く

林道榮

名は應宗字は欵雲、蘿山又は墨痴と號す夙に洛閩の學を修め性理に通じ詩は構思を要せず書は入神の譽あり聲名天下に高く高玄岱と併稱して長崎の二妙と云ふ萬治中江戸に到る衆儒の忌む所となりて再び長崎に歸り後唐大通事に進む奉行牛込氏常に延て嘉客となし詩酒相親しみ號を官梅と賜ふ後官梅を以て姓とす江戸紀行、小學巵言、海外異聞錄、墨痴存稿等の著あり

岡島冠山

名は璞通稱彌太夫字は玉成、冠山は其の號なり經史に渉り稗史小說を好み支那の稗史概ね讀破せざるなく殊に支那語の造詣甚だ深く天下其の右に出づる者なし、物徂徠と友とし善し、徂徠唐語の讀解を冠山に學び稗官學に於て每に其の指授を受く冠山の唐語飜譯書は當時文人必携の書として珍藏せられたり唐話纂要、唐譯便覽、唐音雅俗語類、唐語便用、字海便覽、華音唐詩選、尺牘便覽、通俗水滸傳、通俗元明軍談、通俗明淸軍談、小說讀法等の著あり

儒學史學

松浦東溪

名は陶字は君平東溪は其の號にして又別に競秀亭と號す人と爲り篤實父母に仕へて至孝なり文化七年特に官より褒賜せらる來舶淸人朱綠池に詩韻の法を質し大に得る所あり博覽强記深く經書に渉り詩文を能くし又繪事に長ず其の著長崎古今集覽(十四卷)は考証該博實に長崎史中の白眉なり此の他世界地理を記述せる外國集覽(十卷)等の著あり

饒田謙藏

諱は喻義字は君曉又一に强明、實齋又は西疇の號あり通稱後顯藏と改む(一說に顯謙併用せりと)實は熊野正紹の子なり聖堂助教たり資性篤實人と爭はず夙夜讀書殆んど寢食を忘る櫻木闇齋に師事す深く儒學を修め國學に通じ詩歌を能くす長崎名勝圖繪、天柱錄、西疇耘筆、學論、海魚考及附錄等の著あり名勝圖繪は官命に依り長崎の地誌を編述せるものにて天柱錄は大に我が國體の闡明を力めたるものなり

史學

田邊茂啓

通稱八右衛門功山と號す聖堂書記役たり長崎に正史なきを憂ひ拮据三十年長崎實錄大成十六卷を著はす長崎史茲に至りて成る奉行命じて各官衙をして一部を備へしめ爾後聖堂書記役をして其の後篇を編

輯せしむ、長崎志續編是なり

天文地理學

小林謙貞

名は義信謙貞は其の字なり林吉左衛門に就て天文地理星宿暦法の學を修め出藍の譽あり林氏南蠻の學術に通じ天主耶敎の徒と目せられ正保三年刑死するに及び連座禁錮せらるゝこと二十一年寛文七年初めて青天白日の身となる時に歳六十七同十一年牛込忠左衛門長崎奉行に任ぜられ長崎に來る謙貞の名聲を聞き之を寵遇し待つに客禮を以てす弟子業を請ふ者甚だ多し時に南部草壽京師より來りて經學を講す弟子又少からず謙貞もと草壽と相善し之を牛込氏に薦む遠近の士笈を負うて草壽に趨れは兼て謙貞に從ふの風あり天和三年の暦中十一月、月蝕を記す同年春謙貞其の誤膠を指摘す果して其の言の如し二儀略說一名一輪論(二卷)等の著あり關庄三郎盧草碩等其の門に出づ

西川如見

諱は忠英通稱次郎右衛門求林齋と號す如見は其の字なり少にして父を失ひ母に仕へて孝なり南部草壽に師事し篤く濂洛關閩の學を信す又天文地理を修め名聲海内に馳す享保三年將軍吉宗の召に應して江戸に至り下問を受くる者數十條蓋し天文地理に精通せるを以てなり時に年七十二既にして長崎に歸り旨を奉して著はす所の天文地理の書を獻す本邦に於ける天文暦數の學是より一新の觀あり其の名著增補華夷通商考は實に本邦に於ける最初の外國地理書として世に重んせらる虞書暦象俗解、天文義論、天文精要、兩儀集說、七曜右旋辨論、五行解、四十二國人物圖、水土解辨、日本水土考、長崎夜話草、町人囊百姓囊等の著あり

北島見信

天文地理に精通し延享二年天文方に任ず其の名著紅毛天地二圖贅說は所論警拔引證博洽、特に日本を地誌の卷頭に置き日本を中心として蝦夷朝鮮琉球臺灣より南洋諸島に至る迄之を包括せる一大版圖を亞細亞洲歐羅巴洲等に對して一大洲となし而も之を支那大陸等と地理上分割してフォルチス、ヤマト(威德ある日本)と稱せるが如き其の着想識見の高きを見るべし

本草學

盧草碩

名は玄琢草碩は其の字なり幼にして岩永宗故に師事し萬治元年小野昌碩に就て醫を學び後京に入りて

桂艸叔の門に遊び延寶元年長崎に歸る醫業大に行はる又小林謙貞に就て天文輿地及び運氣の學を修め特に本草學に造詣深く本艸藥性を論し藥性集要を著はし其の名を天下に揮にす福山德潤其の門に出づ

福山德潤

名は一に德順として傳へらる人と爲り沈毅にして達識あり經學を修め本草を盧草碩に學び悉く其の傳を得大阪に移り其の學を唱へて名當代に著はる是に於て本草學盛に興る稻生若水其の門に出づ

蘭學

本木榮久

庄太夫と稱し後剃髮して良意と稱す蘭通詞となり累進して大通詞となる天和二年參府の蘭人と與に江戸に至る通譯詳悉なるを以て特に葵章の弓矢を賜ふ當時幕府の爲に海外の國情文物を精査して貢献する所少からず元祿年間和蘭全驅内外分合圖を撰す蓋し本邦鎖國時代に於ける最初の解剖書なり

西善三郎

家世々蘭通詞を職とす大通詞となる志を蘭學に專らにし刻苦勵精絶えて倦色なしマリーンの字書に據りて蘭和對譯字書の編纂に著手せしも業半にして病歿せり本邦鎖國時代に於て蘭和對譯字書集成の

擧ある之を以て嚆矢とす前野蘭化北島見信松村安之亟等諸大家皆其の示敎を受けたり本邦に於ける蘭學の研究は其の力に依ること大なるものあり

贈正五位 吉雄幸左衛門

諱は永章耕牛と號す通稱後幸作と改む家世々蘭通詞を職とし大通詞となる蘭人に就て深く蘭學を攻究し特に醫術に於て發明する所多く名聲天下に遍く門生六百餘人前野良澤杉田玄白平賀源内等も其の門に出づ診察に尿の檢査を加へしは耕牛の主唱する所とす吉雄流茲に起る因液發備、蘭方書、紅毛祕事錄、布歛吉徽毒論、紅毛流膏藥方等の著あり

本木良永

通稱榮之進、後仁大夫と改め蘭皐と號す家世々蘭通詞を職とし大通詞となる、蘭學に精通し特に天文地理本草に通曉す志筑忠雄大槻玄澤等の蘭學大家其の門に出づ又林子平の如き其の指導を受けて輿地國名譯を著はす平賀源内又本草學に就て其の敎を受く天地二球用法、太陽究理了解說、太陽距離曆解、日月主和解、平天儀用法、阿蘭陀海鏡書、阿蘭全世界地圖書譯、阿陀蘭本草等の著あり又吉雄耕牛と與に阿蘭陀永續曆和解を撰す

志筑忠雄

通稱忠次郎柳圃と號す安永五年稽古通詞となり明年其の職を辭す蘭人及び本木良永に就きて蘭學を修め最も天文學に通曉す本邦に於てニュートンの天文學を輸入せるは實に柳圃を以て嚆矢とす而して其の著曆象新書の如きは空前の偉著にして該書掲載に係る星氣說の如きは本邦科學界の誇と稱すべきものなり又和蘭文法の研究に心を潛め蘭學研究上多大なる便宜を與へ學界に貢献する所多し蘭學の攻究爲めに面目を一新す末次忠助吉雄權之助馬場佐十郎大槻玄幹等皆其の門に出づ曆象新書、四維圖說、八圓儀、三角提要、和蘭詞品考、萬國管窺、鎖國論其他著書少からず（志筑忠雄は一に中野柳圃として傳へらる異名同人なり）

中山武德

通稱得十郎後作三郎と改む家世々蘭通詞たり蘭學に造詣深し文化十三年御用和蘭字書飜譯認掛を命せられ有名なるドーフハルマ字書の編纂主任となり天保四年まで十七ヶ年間增補訂正に從事し最初ドーフの助力によりて編纂せる字書の面目を一新す大冊二十二卷幕府厚く中山氏を褒賞す

末次忠助

獨笑と號す家世々後興善町乙名たり總町乙名頭取となり又出島町乙名となる志筑忠雄の高足なり蘭學に精通し特に天文學に造詣深く數學物理に於ては當時獨步と稱せらる人と爲り個儻不羈好て諧謔をなす人目して奇人となす新宮凉庭美馬順三等蘭學大家其の門より出づ

美馬順三

諱は茂親、如柳と號す阿波の人なり支那語を唐通事周竹溪に蘭語を蘭通詞中山武德吉雄權之助に度數の學を末次忠助に就て學ぶ文政年間蘭館に出入して甲比丹（カピタン）ブロムホフと親交ありシーボルト來るに及び率先して其の門下に從遊す後鳴瀧塾の創立に際し其の都講に選拔せられ天下の英俊を薰陶す幕府の侍醫石坂竿齋の撰に係る針灸知要を蘭譯してシーボルトに示すシーボルトが本邦の針灸術を知悉するを得しは之が爲なり其の著牛痘接法は泰西種痘術に關する著述にして其の蘭文にて認めたる產科の書は特にシーボルトの推薦によりてバタヴヰヤ學會報告書中に掲載せられたり

二宮敬作

如山と號す伊豫の人なり歲二十二長崎に遊びシーボルトに師事す特に醫術外科を以て名聲海內に鳴り宇和島侯の侍醫に擧げらる嘗て九州の諸高山及ひ富士山を測量す山高を測るに當時泰西嶄新なる測量術を利用したるは是を以て嚆矢とす人と爲り磊落小節に拘らず而も親に事ふる孝人を待つ恕事に臨んで勇シーボルトの如山を視る殊に厚く其の出遊博物採集等多く之を伴ふ美馬順三歿後高良齋と與に鳴瀧塾の爲めに盡力する所少からずシーボルト我國を去るに臨み託するに一女伊禰を以てす如山の伊禰

を待つこと甚だ至れり伊藤如山に就きて外科産科等を修め後朝廷に召されて産事を治す如山の聲譽海外に馳せ遂に獨逸に於て二宮敬作傳上梓せらるゝに至る

蘭學英佛語

本木正榮

通稱庄左衛門蘭汀と號す父良永を襲きて蘭通詞を職とす大通詞となる才識高遠蘭學の蘊奥を究め進んで英語をヤン、コック、ブロムホフに佛語をヘンデレキ、ドーフに就て學び文化八年九月暗厄利亞(アングリア)興學小筌十卷を撰して之を官に献し銀十枚を賜ふ暗厄利亞語林大成十五卷の編纂に際しては自ら主任となり馬場貞歴末永祥守楢林高美吉雄永保(權之助)等の蘭通詞を督し、ブロムホフの指導に依りて之を成就す是れ實に本邦英和對譯字書の嚆矢なり又ドーフの指導を受けて吉雄永保楢林高美等を督して拂朗察(フランス)辭範を編纂す本邦佛語に關する著述あるは實に之を以て始とす、和蘭砲術備要、軍艦圖解考例等の著あり眞に本邦英佛學の開祖と謂ふべし

吉雄權之助

諱は永保如淵と號す通稱六次郎、後權之助と改む、吉雄耕牛の第三子にして蘭通詞を職とし後大通詞見習となる志筑忠雄に就て蘭學を修め佛語をドーフに英語をブロムホフに就て學び特に蘭語に於ては蘭人大に之を推重し當時海内無比と稱せらる文化八年正月阿蘭陀小通詞末席たりし際に英和對譯字書を撰して之を官に献じ銀五枚を賜ふ又暗厄利亞(アングリア)語林大成拂朗察(フランス)辭範及びドーフ、ハルマ字書編纂に際して與る所の力甚だ大なり其他天馬異聞等の著あり新宮涼庭美馬順三高野長英伊藤圭介等は其の出色の高足として世に識らる

楢林高美

榮左衛門と稱す家世々蘭通詞を職とす本木正榮吉雄永保(權之助)と與に本邦英佛語の開基たり暗厄利亞(アングリア)語林大成及び拂朗察(フランス)辭範編纂の際に於ける功勞頗る顯著なり爾後幕末に至るまで英語を家學として子孫之を傳承し以て其の普及に努めたり

蘭學英語

森山多吉郎

初め榮之助と稱す後多吉郎と改む家世々蘭通詞たり蘭學に通じ又英語に熟達す嘉永年間露國使節長崎來舶の際譯官として彼我の間に重んぜられ又ペルリ來朝の節は特に幕府に徵され樽俎折衝克く其の任

務を全うす而して江戸大坂兵庫新潟の開港延期問題唐太國境問題等に關しても終始幕府外交の事に與りて功勞尠からず通辨役頭取外國奉行支配調役兵庫奉行附組頭等に歷任す津田仙福地源一郎須藤時一郎富永冬樹沼間守一等は其の門下知名の士なり

堀　達之助

後達之と改む蘭通詞なりペルリ來朝の際特に幕府に徵され譯官として樽俎折衝克く重任を全うす爾後幕末外交の事に與り名聲嘖々たり幕末の名臣堀田侯に重用せらる後江戸開成所教授となり維新後開拓使大主典に任せらる、英和對譯辭書等の著あり英語に精通して文化以降幕末に至る迄纔に命脈を保ちたる英語の研究に一新生面を開きたり

蘭學露語

馬場貞由

通稱佐十郎字は職夫穀里と號す阿蘭陀通詞なり志筑忠雄に就て蘭學を修め夙に出藍の譽あり文化年間幕府天文臺吏に任ず露人北邊を騷かすに當り幕吏其の露人ゴロウニン以下數名を捕へて松前に幽閉す貞由官命によりゴロウニンに就きて露語を修め俄羅斯（クロシヤ）語小成を著す實に本邦露和對譯字書の嚆矢なり其の他野作（エヅ）雜記、慧星譯說、蘭語九品考、究理摘要、泰西度量考、泰西七金譯說、穀里漫錄等著書多し

支那語滿洲語

鄭幹輔

諱は昌延字は素敬敏齋と號す通稱初め來助次に大助後幹輔と改む少時唐通事周竹溪に師事し聰慧衆に拔んづ文政八年十五にして稽古通事となる天保八年拔擢せられて江戸昌平校に入り四年を經て歸る安政四年唐大通事に進む幹輔滿洲語に塾達し嘉永年間翻譯滿語纂論及び御製增訂清文鑑和解等の編纂は其の指導援助に依るもの大なり實に本邦に於ける滿語の研鑽は此の時代を以て最盛の期とす又夙に率先して英語の研究を奬勵し偶々來朝せる米人マックゴウワンを聘し子弟を勸誘して英語を修めしむ公務の傍常に後進の敎育に意を用ゐ門下に從遊するもの尠からず明治維新後榮達の士多し幕末の志士吉田松陰の如き亦實に其の示敎を受けし一人なり

砲術

藥師寺宇右衛門

諱は種永自覺流砲術の開祖なり島原亂の際父久左衛門に隨ふて軍功あり延寶初年長崎防備石火矢の分一圓御預りを命ぜらる

贈從五位　阪本孫八

諱は俊豊字は伯壽天山と號す信州の人なり家世々荻野流砲術を能くす儒學を好み群書を渉獵し最も易に精し荻野氏に從つて砲術を修め周發大銃を發明し荻野新流を創す又唐音を學びて國音飜轉の煩を除かんと欲し長崎に來り唐人及び譯官に就きて學び傍平戸藩主の請により其の藩邸に於て砲術を教授す高島四郎兵衛及び其他地役人の就て學ぶもの多く荻野流長崎に起る火砲說兵律論、銃陣詳說、周發圖說、易學流論、會心亭集、天山遺稿等の著あり

大木藤十郎

諱は忠貞野鶴又一に可月と號す船番より出でゝ觸頭に進む常に海外の事情に心を寄せ以て國家の遠計に資せんとするの志あり初め荻野流砲術を修め後高島流火技を學び其の蘊奥を究む安政元年幕府蘭人を聘して汽船運用法の傳習を開くや藤十郎其の頭取たり同年佐賀藩鍋島侯に聘せられ藩士に運用航海機關術を授く當時諸藩士來りて益を請うもの多し砲術捷經秘錄等の著あり

贈正四位　高島四郎太夫

諱は茂敦秋帆と號す家世々町年寄たり漢籍に通し書を能くし夙に荻野流砲術を修む時に我國武備弛緩す秋帆大に之を慨し西洋流陣法及砲術を天下に率先して輸入し大に我國の兵制を改革せんと欲す親しく蘭人に就き其の技を練り更に自ら工夫する所あり且自費を以て銃砲を購入し子弟を集めて砲術を傳習す幕府江戸に召し其の技を德丸ヶ原に演せしめ幕士をして就て講習せしむ高島流砲術茲に起り我國の銃陣法一變す後讒に會ひ囹圄に繫かるゝもの十餘年赦さるゝの後再び閣老阿部伊勢守に拔擢せられて幕府に仕へ砲術の教授に從事す幕府賜ふに流祖の語を以てす其の長崎に在るや又貿易の發展に努め西洋文明の輸入に腐心する等其の施設する所尠からず幕末の名士江川太郎左衛門下曾根金三郎村上範致小原鐵心等其の門に出づ明治廿六年十二月正四位を追贈せらる

贈正五位　中島名左衛門

諱は喜勝松堂と號す通稱孝平後名左衛門と改む人と爲り質直寡言にして識見あり幼より數理に精し夙に西洋の兵學砲術に志し高島秋帆並蘭人に就き西洋流砲術を修め其の蘊奥を究む秋帆の獄輕むの後各藩士の來り學ぶもの多し萬延元年兵制改革に關し幕府に建白する所あり文久元年豐後岡藩中川侯特に砲術教授を囑託し物頭格を以て之を遇す既にして又長州毛利侯の聘に應じ建策する所多し馬關砲臺は實に其の經營に係るものなり偶々外艦砲擊に關し議藩士と議合はす終に馬關に於て刺客の暗殺する所

となる三兵答古知幾、練兵臆說、孫吳俗解、銃丸彈道法、孫子俗談等の著あり明治三十五年十一月正五位を追贈せらる

砲術儒學

山本晴海

名は逸字は無逸通稱清太郎秋村又一に淡齋と號す實は竹內良太夫の長子なり父の職を襲きて船番に補せらる漢籍を松浦東溪廣瀨淡窓に學び兵學を山鹿高補に西洋砲術を高島秋帆に學んで一も達せざるなし又柔道劍術の奥義を極む人と爲り嚴正事物を苟もせず進退常に其の度に適す夙に大義に通し國勢挽回の志あり年二十五職を家弟竹內貞基に讓り專ら儒學砲術を敎授す來り學ふもの三百餘人後蓮池侯の囑に應じ往て砲術を敎授す高島流砲術傳授書、韞陽錄、示蒙小說、無名草、爲政集說、淡齋文稿、謝花雜抄、淡齋詩抄、大淸輿地大略、鈴林雜抄、狗續蒙牛註解等の他築城兵器に關する著あり

航海術

竹內貞基

通稱卯吉郎淸潭と號す山本晴海の弟なり砲術を高島秋帆に學ぶ漢籍に通じ武術に達す安政元年蘭人より汽船運用法反射爐使用法を學ぶ翌年更に航海術を學び觀光丸を運用して江戸に到る尋て大木藤十郎與に佐賀に至り藩士に運用航海機關術を授く後江戸に至るや幕府强て海軍操練所敎授に任ず嘗て鍋島侯及水戸侯の囑を以て木製機關雛形を製して上つる就て學ぶもの多く佐野常民前島密中村雄飛等其の門に出づ著はす所航海圖說數十卷あり

活版術

贈從五位 本木昌造

諱は永久梧窓と號す又笑三點林堂等の別號あり初め阿蘭陀通詞たり安政二年海軍傳習此の地に開始せらるゝに及び昌造等命に依り內外彼我の間に通譯す後飽之浦製鐵所取締役となり銳意改革に力め其の基礎を確立せしむ嘗て製鐵所汽船を運用して江戸大阪長崎間を往復し以て航海業の勃興を促す維新後新街義塾を起して普通敎育の必要を唱導す夙に鉛版印刷術の研究に苦心するもの十數年明治三年に至りて僅に成る實に我國鉛版印刷術の創始なり東京築地活版製造所大阪活版製造所等は孰れも其の創設に係り長崎西濱町鐵橋は官命に依りて經營する所なり其の著西洋古史略、新塾餘談、小學讀本、單語篇、童蒙必携等は新街義塾に於て印刷發行せるものにして尙ほ紅毛秘事略等の著あり明治四十五年二月從五位を追贈せらる

寫眞術

上野彦馬

李蹊と號す漢籍を廣瀨淡窓に蘭學を大通詞名村八右衛門に學び又蘭醫ポンペに就て舍密學を修む偶々寫眞術 Photography の記述あるを見て感する所あり爾來斯術を研究すること多年苦心慘憺終に其の方術を得文久三年始めて中島に開業す實に我國寫眞術の祖なり舍密局必携の著あり

美術

喜多元規

繪事を能くし特に人物描寫に長ず畫く所往々天機妙會眞に逼る傳染又新意あり宇治黃檗山萬福寺所藏に係る元規筆隱元禪師像は國寶として世に名高し

渡邊秀石

最初の唐繪目利たり唐僧逸然に就て繪事を修め人物雲煙花卉翎毛往くとして佳ならざる所なく當時畫神と稱せらる、而も氣節を以て高く自ら標榜し、故らに筆蹟に名印を施さゞるを以て其の傑作は々往宋元名家の作と誤らる儼然崎陽畫壇の泰斗たり長崎派の畫是に於て始めて興る

神代繡江

通稱彦之進後甚左衛門と改む畫名を熊斐と稱す家世々唐通事たり夙に繪事を嗜み享保中清國より沈南蘋の渡來するや繡江官許を得て之に從ひ研鑽倦ます遂に其の秘奥を得畫名一世に高く弟子就て學ぶもの前後千餘人宋紫石建部凌岱森蘭齋松林山人僧鶴亭眞村蘆江等其の門に出づ熊斐の畫風天下を席捲し我國丹青界爲めに一新の觀あり

釋鐵翁

俗性日高氏春德寺の住職なり人と爲り狷介氣節あり幼にして清國畫家江稼圃に學びて漢畫の妙趣を得能く山水を寫し殊に蘭に於て入神の技あり當時木下逸雲三浦梧門と併せて長崎文人畫の三筆と稱せらる

木下逸雲

名は相宰通稱志賀之助字は公宰逸雲は其の號にして一に養竹山人如螺山人等の號あり家世々八幡町乙名たり初め畫を石崎融思に學び後江稼圃に從ひ南畫の秘奥を得又狩野土佐等諸派を能く臨摹す人と爲り多藝多能醫術、射術、國雅、管弦、茗茶、篆刻等に通じ又書を能くす

公益

牛込忠左衛門

諱は勝登長崎奉行として寛文十一年より延寶八年に至る十箇年在勤せり勤役中貿易法を改定して銀貨濫出を防止し海上を警邏して密貿易を禁じ聖堂を立山に再興して彝倫の恒道を敎へ藥園を設けて療病に資し文學を奬勵して人材を登庸し神事町を劃して年十一町と定むる等制度文物其の面目を一新し人材一時雲の如くに起る

倉田次郎右衛門

本五島町乙名なり長崎の地水利乏しきを憂ひ寛文七年錢屋川に水源を覓め埋樋を市内に通じ以て飲用水を給し事變に備ふ市民其の慶澤に浴すること二百餘年本河内水道成るに至りて止む倉田水樋是なり

慈善

園山善爾

諱は信庸、獨愼居士と號す和泉の人なり夙に唐貿易を營み巨利を博し慈善に心を用ふ天和年間長崎附近穀登らず餓殍途に滿つ善爾即ち粥を煑て救恤に力むること數千人長者の名遠近に聞ふ伊勢町の阿彌陀橋は其の自費を以て架する所なり

敬神

青木賢清

金重院と稱す佐賀の人なり長崎の地吉利支丹宗盛にして住民敬神の實なきを慨し吉利支丹敎徒の迫害を忍び萬難を排して寛永元年諏訪神社を圓山の地に再興す子孫相傳へて宮司となり以て明治維新に至る

弘法

釋道智

俗姓有馬氏肥前有田の人なり文祿年間長崎に來り初めて佛敎を說く時に吉利支丹宗盛にして迫害日に甚だしきものあり道智益布敎に力め奉行亦大に其の布敎を助く慶長九年正覺寺を創す實に市街寺院再興の始なり是より寺院陸續として起る當時道智の他大音寺傳譽、洪泰寺泰雲、光永寺慶西、大光寺慶了を併せて五僧の稱あり

烈士

松平圖書頭

諱は康秀後康平と改む長崎奉行なり治蹟あり文化五年八月英艦フェートン號長崎港外に來り短艇を派して港内蘭船を物色す時に圖書頭長崎に在勤す即ち命を當港警備佐賀藩に下して英艦を擊攘せしむ佐賀藩兵少なく命を奉すること能はす既にして英艦去る圖書頭擊攘機を失し我が國威を失墜せしことを愧ぢ自ら責任を負うて西役所に自及す時人以て壯烈となす事幕府に聞ふ幕府命して邊海の防備を修めしむ爾來本邦海防の警備益嚴なり是より先き文化元年露國使節レサノフの長崎に渡來するや我が邦人は滿洲北海唐太等露人南下の形勢愈看過すべからざるを察し今又英艦狼藉事件の爲め松平圖書頭の自及するに及んで更に英國勃興の影響が遠く極東の日本に波及せるを悟りて蘭國以外歐洲强國の實情を察知するの機會に逢着し上下大に覺醒する所あり外交上露語佛語英語及び滿語等を研究するの必要を痛切に感するに至れり是より外國語の研究大に興る

外國人

隱元

名は劉琦字は隱元俗姓林氏明國福州府福清縣東林の人なり承應三年明國より渡來興福寺に居る後命に依り黃檗山萬福寺を山城國宇治に創す實に我國黃檗宗の起原なり後水尾院上皇御歸崇淺からず將軍綱吉以下諸侯の歸依するもの多し寛文十三年四月隱元病革まるや御水尾院上皇特に大光普照國師の賜號及び宸翰を賜ふて容態を御下問あらせ給ふに至る黃檗山志、黃檗語錄、龍泉語錄、弘戒法儀等は明國に在りし頃の著述にして尙ほ本邦渡來後示衆語錄、扶桑語錄、扶桑全錄、太和集、同續集、松陰一集同二集、同三集、同續集、雲濤一集、同二集、同三集、擬寒山詩、又擬寒山詩、普門草錄、崇福寺錄佛舍利記、佛祖圖贊、黃檗法規、法語等の著あり普照國師廣錄は嗣法門人木菴即非以下黃檗高僧の編述せるものにて國師の行實、詩偈、法語、書問其他を揭載す

獨立

「名は性易字は獨立天外老人就庵惕芳等の號あり明國浙江杭州府仁和縣の人なり承應二年明國より渡來す博學贍聞醫術は痘科の秘奥を傳へ書は入神の譽あり永陵傳信錄、流冠編年錄、殉國彙編等は來朝前の著にして一峯雙詠集、有樵別緒記、就庵獨語等は我國渡來後の著に係る其の他高玄岱が獨立の遺稿を

編輯せる天外老人全集十五卷あり高安岱北山道長等其の門に出づ

逸　然

名は性融字は逸然俗性李氏明國浙江杭州府仁和縣の人なり正保二年渡來興福寺に居る脩禪の際、繪事を好み最も人物佛像に巧なり門人甚だ多く渡邊秀石僧若芝等其の中に冠たり唐繪と稱するもの逸然を以て開祖となす

木　菴

名は性瑫字は木菴俗姓吳氏明國泉州晋江の人なり明曆元年渡來福濟寺に居る後宇治の萬福寺に至り隱元を繼ぐ寛文十年江戸瑞聖寺を開創す同年靈元天皇勅して紫衣を賜ふ黃檗の宗風是より益振ふ明治十四年十二月明治天皇特に慧明國師の諡號を賜ふ其の著はす所象山語錄、瑞聖語錄、紫雲止草等あり又嗣法門人編纂に係る木菴禪師年譜、木菴禪師東來語錄等あり

即　非

名は如一字は即非俗姓林氏明國福州府福清縣の人なり幼にして父を失ひ母に仕へて至孝なり明曆三年渡來崇福寺に居る後黃檗山に至り木菴と與に兩座に擢んでらる小倉侯小笠原氏請うて豐前廣壽山福聚寺を開かしむ隱元木菴と與に黃檗三僧の稱あり即非禪師全錄は嗣法門人の編する所なり

范　道　生

一に范石甫として知らる寛文年間明國より渡來佛像を造ることを善くす其の作物は明末彫刻の精華として世に稱せらる宇治萬福寺及び長崎崇福寺の羅漢像は其の作に係る詩文書畫を能くす

千　獸

名は性俊(一に性安)字は千獸明國福州府長樂縣の人なり萬治三年渡來崇福寺に居る天和元年長崎饑饉あり千獸即ち藏書器物を賣りて米麥に代へ大釜を鑄て飢民を賑恤すること二箇年後宇治萬福寺に至り住職となる元祿十一年東山天皇勅して紫衣を賜ふ嗣法門人編纂に係る千獸禪師語錄等あり

伊　孚　九

名は海字は孚九、莘野滙川等の號あり清國の人なり享保より延享に至る二十有餘年間長崎に來往す詩書畫與に巧なり清水伯民其の畫法を得たり池大雅も亦其の畫風を慕ひ揣摩精究遂に南宗に入るを得た

陳　振　先

清國の醫なり享保六年六月渡來唐人屋敷に居る此の年幕府の命により長崎附近の山野を跋涉し藥草を採收して性効を說き處方を錄して上つるもの百六十二種聖堂祭主向井元成之を筆記し名づけて陳振先

採藥錄と稱す本邦漢醫方に資する所尠からず

沈　燮　菴

名は丙字は燈幃燮庵と號す清國浙江杭州府仁和縣の人にして儒者なり享保十二年渡來唐人屋敷に居る博學詩文に長ず是より先き長崎聖堂釋奠の事ありと雖儀式整はず燮菴來るに及び奉行命じて序次を正し祭式を定めしむ是より相傳へて明治に及べり燮菴在留の時天下文運甚だ盛にして碩學大儒の此の地に遊ぶもの多し其の崎陽に關する詩文は載せて長崎名勝圖繪にあり

沈　南　蘋

名は銓字は衡齋南蘋と號す清朝の碩學沈德潛の同族なり享保十六年長崎に來り同十八年歸帆す頗る繪事を善くし特に花鳥に巧なり設色妍麗寫生の微に入り而も品格風韵あり神代繡江其の衣鉢を傳ふ

宋　紫　岩

名は岳字は紫岩石耕と號す、清國苕溪の人寶曆年間渡來繪事を能くす當時神代繡江畫名一時に鳴り四方の畫人爭うて師事す江戸の人楠本雪溪亦其の門下に在り適々紫岩來朝するや深く其の畫風を欽仰し親しく紫岩に就て學び自ら畫名を宋紫石と改むるに至る紫石の畫風亦大に世に行はる

ワリニヤニ　Alexander Valignani

伊太利の人なり永祿十一年肥前口ノ津に來る稍我が國情を識るに及び五島に到りて布教に從事す元龜二年本邦を去り天正七年再び來朝しカブラル大師の後を承けて日本全國の師長となる天正九年本能寺に於て織田信長に謁し同十年大友有馬大村三侯の遣歐使節と與に長崎を發す天正十八年印刷機を携へて再び長崎に著す泰西印刷術を我が邦に輸入せるは實にワリニヤニを以て嚆矢とす、同年印度副王の大使として聚樂第に於て大閤秀吉に見ゆ後本邦を去り慶長三年又我國に來る天正年間九州各地のみならず遠く安土等に至るまで或は學堂を建て或は慈善事業の振興に努め特に當時既に泰西の印刷機を我國に輸入せるが如き實に本邦文化の啓發に寄與せるもの尠からずと謂ふへし

ケンペル　Engelbert Kaempfer

獨逸の人なり識見高邁醫學博物學に通曉す元祿三年出島蘭館醫として渡來出島に留ること二ヶ年貢使に隨ひて江戸に登ること二回深く日本の事物を研究し歸國の後日本歷史を著はし我國を泰西に紹介すること最も詳密精確なり

ツンベルク　Karl Peter Thunberg

瑞典人にして醫術に精しく殊に植物學に於てはリンネの高足として泰西の學界に重んぜらる安永四年

出島蘭館醫として渡來し在留一ヶ年江戸に至ること一回吉雄耕牛桂川甫周中川淳庵等其の示教を受けて得る所頗る多し在留中日本の國情並植物を研究し其の鑑定する所の新類二十二屬新種三百十六品に及ぶシーボルトがケンペルと併せてツンベルクを景仰せるは蓋し偶然に非るなり歸國後歐羅巴亞弗利加亞細亞及び日本旅行記、日本植物誌（Flora japonica）日本植物圖譜（Icones Plantarum Japonicarum）等の著あり

チチング Isaak Titsingh

和蘭の人なり安永八年甲比丹として渡來し天明四年まで來往す島津重豪朽木昌綱平賀源内司馬江漢大槻玄澤及び當時長崎の蘭通詞など其の指導に依り蘭學の攻究上便宜を得たること少からず而して我國在留中常に蘭學者の研究を助け又我國に造船術を輸入せんとして技術研究の爲め邦人を海外に派遣せんことを企劃せるが如き日歐交渉史上顯著の事蹟なり又朽木侯長崎奉行久世丹後守桂川甫周中川淳庵等と親交あり同五年蘭領印度總督に任ぜられ翌年蘭清通商交渉の爲め清國に使す爾後二箇年にして歐洲に還り享和四年佛國パリーに客死す其の名著日本紀事（英譯本イラストレイションズ、オブ、ジャパン、蘭譯本ベソンドヘーデン、オウフル、ヤパン）は吉雄耕牛松村安之亟檜林重兵衛堀門十郎等蘭通詞の助力に依りて編纂せるものにて主として日本の風俗、將軍家譜、古文孝經等に就て記述し我國の風俗習慣を最も正確に泰西に紹介せるものなり又明和安永の頃盛に我が國に勃興せる浮世繪を直に海外に傳へて泰西に本邦の繪畫を紹介せるが如き日本繪畫史上特筆すべきものと謂ふべし

ドーフ Hendrik Doeff

和蘭の人なり寛政十一年渡來享保三年甲比丹に任ずドーフ在留中ナポレオン一世歐洲を席捲し蘭國亦其の征服する所となり給與繼がず日本官憲の補助を仰ぐに至るドーフ官命に依り阿蘭陀通詞等の拂朗察辭範及び蘭和對譯字書（即ち世にドーフ、ハルマ字書と稱するもの）の編纂を指導して我國學界に寄與せしこと尠からず在留中文化十一年同十二年兩度英國人は出島を奪取せんとせしもドーフ毅然之を斥けて屈せず其の本邦に在ること十有九年文化十四年歸國す蘭國王特に勳章を賜ふて其の功を賞す日本回想錄の著あり

ブロムホフ Jan Cock Blomhoff

和蘭の人なりドーフ出島蘭館長たりし際にヘトル役（甲比丹の次位）として在留す文化年間蘭通詞に英語を教授し本木正榮等英和對譯字書の編纂を指導す實に本邦に於ける英語の研究は之を以て嚆矢となす適々英人ジャワを領し其の餘勢に乘じて文化十一年出島蘭館を奪ひ日英貿易を開始せん事を企つるに臨み甲

比丹ドーフ智略縱橫其の鋭鋒を挫くやブロムホフ親しくジャワに航し英總督ラッフルスと會見し出島蘭館の獨立を認めてジャワと長崎との間に通航を開かん事を交渉せしも總督は其の初一念を翻す事を肯んぜず翌年秋ブロムホフに退去を命じ之を英國に送る彼は飽迄も祖國の民として出島蘭館維持の爲め東奔西走して止まざりしが歐洲戰雲漸く歛まりて文化十四年ブロムホフは再び出島蘭館長として我國に渡來し、文政九年まで在留せり本國和蘭が一時他の屬領となり孤立賴るなきの秋に當り極東長崎の一角に猶ほ祖國の三色旗を翻へすことを得たるは實にドーフ及びブロムホフの力と謂ふべく百年の後人をして欽慕措く能はざらしむるものあり

シーボルト Philipp Franz von Siebold

獨逸の人なり學問該博特に醫術及び博物學に精通す文政六年渡來官許を得て或は臨床診療に依り或は鳴瀧校舍に於て醫學及び博物學を教授す天下の學徒其の門に集るもの甚だ多く美馬順三高良齋湊長庵岡研介吉雄幸載楢林榮建楢林宗建伊東玄朴高野長英二宮敬作土生玄碩戸塚靜海黑川良安伊藤圭介等天下の英俊先を爭うて其の門下に從遊し我國醫界及び理學界の面目一新す後安政六年再び長崎に來り文久元年江戸に召されて外國事務顧問となり同年末歐洲に還る其の著日本紀事は我國を泰西に紹介せしこと甚だ大なり此の他博物學に關する著述少からず

モーニツキ Mohnike

和蘭の人なり醫術に精し嘉永元年渡來楢林宗建と謀りて痘痂を輸入し種痘法を傳ふ又始めて聽胸器(聽心器の事なり)を輸入す蘭通詞品川藤兵衛(號梅村)モーニツキと謀り之を模造す是より心臟及び肺臟の音を聽き以て診斷を確むるを得たり後杉田成卿其の模造品を得て之を用ゐ聽胸器用法略說を著はせり

ポンペ J. L. C. Pompe van Meerdervoort

和蘭の人にして軍醫なり安政三年渡來醫術傳習所及び小島養生所に教授と爲り我國醫術の開發醫生の教導に貢獻せしこと大なり安政五年コレラ大流行に際し災害の猛烈ならざるを得たるは主として其の力に依れり本邦醫生の爲め特に編纂せる書あり又「日本滯留五年間」等の著あり

フルベツキ Guido Hermaan Fridolin Verbeck

和蘭の人にして米國宣教師として安政六年渡來布教の傍英語を教授し後濟美館に英語教師となる子弟就て學ぶもの多し當時副島次郎(種臣)大隈八太郎(重信)等皆其の示教を受く後東京に至り日本政府の翻譯官又は官立學校の教師となりて本邦文化の開發に寄與する所尠からず晩年專ら聖書翻譯及び傳道に從事せりフルベツキ本邦在留數十年交遊廣く維新の元勳より下賤の者に至るまで先生と稱して欽仰

せるもの多かりき

鄉土先賢列傳 終

鄉土先賢墳墓並遺族

事蹟	氏名	墓所	遺族住所氏名
海外貿易	末次平藏	京都	
	船本顯定		
	後藤宗印	長崎皓臺寺	長崎市西山 後藤洲次郎
	高木作右衛門	長崎皓臺寺	長崎市鍛冶屋町西山 高木孝太郎 高木忠忱
	荒木宗太郎	長崎大音寺	上海 荒木春端
遠征勇武	津田又左衛門		
	濱田彌兵衛	長崎皓臺寺（舊）大村東山（現在）	東彼杵郡大村 濱田重一
探險	島谷市左衛門	長崎禪林寺	
醫學儒學本草學	贈正五位 向井元升	京都眞如堂	門司市 向井兼孝
	栗崎道喜		
	杉本忠意		
	西玄甫	東京染井墓地	仙臺市 西成甫
	西松逕	長崎觀善寺	

醫學	贈正五位	穎川入德	長崎春德寺
	贈正五位	北山道長	長崎聖德寺
		檜林新吾兵衛	同
		檜林宗建	上
國文學		青木永弘	京都
		向井去來	
		大江宏隆	
		伊奈建彥	長崎西山椿原
		近藤光輔	長崎皓臺寺
		青木永章	長崎西山椿原
		中島廣足	
儒學		北島雪山	長崎皓臺寺(今ナシ)
		南部草壽	東京上野護國院
		高玄岱	
		向井元成	長崎皓臺寺
		南部南山	
		中野撝謙	東京深川要津寺(舊)長崎本蓮寺(現在)福濟寺
		盧草拙	

		長川東洲	東京戸塚村
儒學支那語		彭城宣義	長崎崇福寺
		林道榮	長崎皓臺寺(風頭山頂)
		岡島冠山	
儒學史學		松浦東溪	長崎小田ノ原
		饒田謙藏	長崎觀善寺
史學		田邊茂啓	長崎長照寺
天文地理學		小林謙貞	
		西川如見	長崎長照寺
		北島見信	
本草學		盧草碩	長崎本蓮寺(舊)長崎福濟寺(現在)
		福山德潤	
		本木榮久	長崎大光寺
		西善三郎	長崎本蓮寺(舊)長崎永昌寺(?)
	贈正五位	吉雄幸左衛門	長崎禪林寺
		本木良永	長崎大光寺
		長川錄之助	長崎上西山町
		彭城詮一	長崎市東小島町
		官梅雅一	
		西完二	東京市京橋區築地二丁目
		西川忠亮	
		高朗百壽	東京市芝區城山町七一盧
			東京市麹町區中六番町盧
		吉雄永壽	東京市四谷區東信濃町二八

蘭學	志筑忠雄			
	中山武德	長崎	大音寺	金澤市
	末次忠助	長崎	本蓮寺	長崎市爐粕町
	美馬順三	長崎	大音寺	中山武信
	二宮敬作	長崎	皓臺寺	末次忠
蘭學英佛語	本木正榮	長崎	大光寺	長崎市
	吉雄權之助	長崎	禪林寺	二宮良夫
	楢林高美	長崎	聖德寺	東京市四谷區東信濃町二八
蘭學英語	森山多吉郎	長崎	本蓮寺	長崎市江戸町
	堀達之助	長崎	大音寺	吉雄永壽
蘭學露語	馬場貞由	東京市下谷宗延寺		楢林政太郎
支那語滿洲語	鄭幹輔	長崎	崇福寺	神戸市山本通四丁目七十二ノ五
				堀俊三郎
砲術	藥師寺宇右衛門			東京市四谷區簞笥町一
	贈從五位 阪本孫八	長崎	皓臺寺	鄭永昌
	贈正四位 大木藤十郎	長崎	大音寺	長崎市磨屋町
	贈正五位 高島四郎太夫	東京	駒込大圓寺	藥師寺熊太郎
	中島名左衛門	長崎	正覺寺	長崎市大井手町
				成田磧十郎
				長崎市中川町
				中島四方三郎

砲術儒學	山本晴海	長崎	皓臺寺	長崎市爐粕町
航海術	竹內貞基	長崎	皓臺寺	長崎市上西山町
活版術	贈從五位 本木昌造	長崎	大光寺	
寫眞術	上野彥馬	長崎	皓臺寺（風頭山頂）	東京市小石川區武島町二一
美術	喜多元規	長崎	深崇寺	長崎市浦五島町
	渡邊秀石	長崎	崇福寺	大坂市北區曾根崎町
	神代繼江	長崎	崇福寺	長崎市西上町
	釋鐵翁	長崎	春德寺	
	木下逸雲	長崎	禪林寺	長崎市八幡町
公益	牛込忠左衛門			
	倉田次郎右衛門	長崎	聖德寺	
慈善	園山善爾	長崎	光永寺	長崎市紺屋町
敬神	青木賢清	長崎	西山椿原	
弘法	釋道智	長崎	正覺寺	長崎市正覺寺
烈士	松平圖書頭	長崎	大音寺	

外國人

明國	隱元	宇治萬福寺	
明國	獨立	宇治萬福寺 長崎崇福寺	
明國	逸然	長崎興福寺	
明國	木菴	宇治萬福寺	
明國	即非	長崎崇福寺	
明國	范道生	長崎崇福寺	
明國	千獸	宇治萬福寺	
清國	伊孚九		
清國	陳振先		
清國	沈燮菴		
清國	沈南蘋		
清國	宋紫岩	長崎興福寺	
伊太利	ワリニヤニ		
獨逸	ケンペル		
瑞典	ツンベルグ		
和蘭	チチング		

和蘭	ドーフ	
和蘭	ブロムホフ	
獨逸	シーボルト	
和蘭	モーニツキ	
和蘭	ボンペ	
和蘭	フルベツキ	東京青山共同墓地

先賢氏名誤植正誤

頁數	行數	誤	正
七頁	十行目	檜林宗健△	檜林宗健○
三十八頁	二行目	沈燮△菴	沈燮○菴

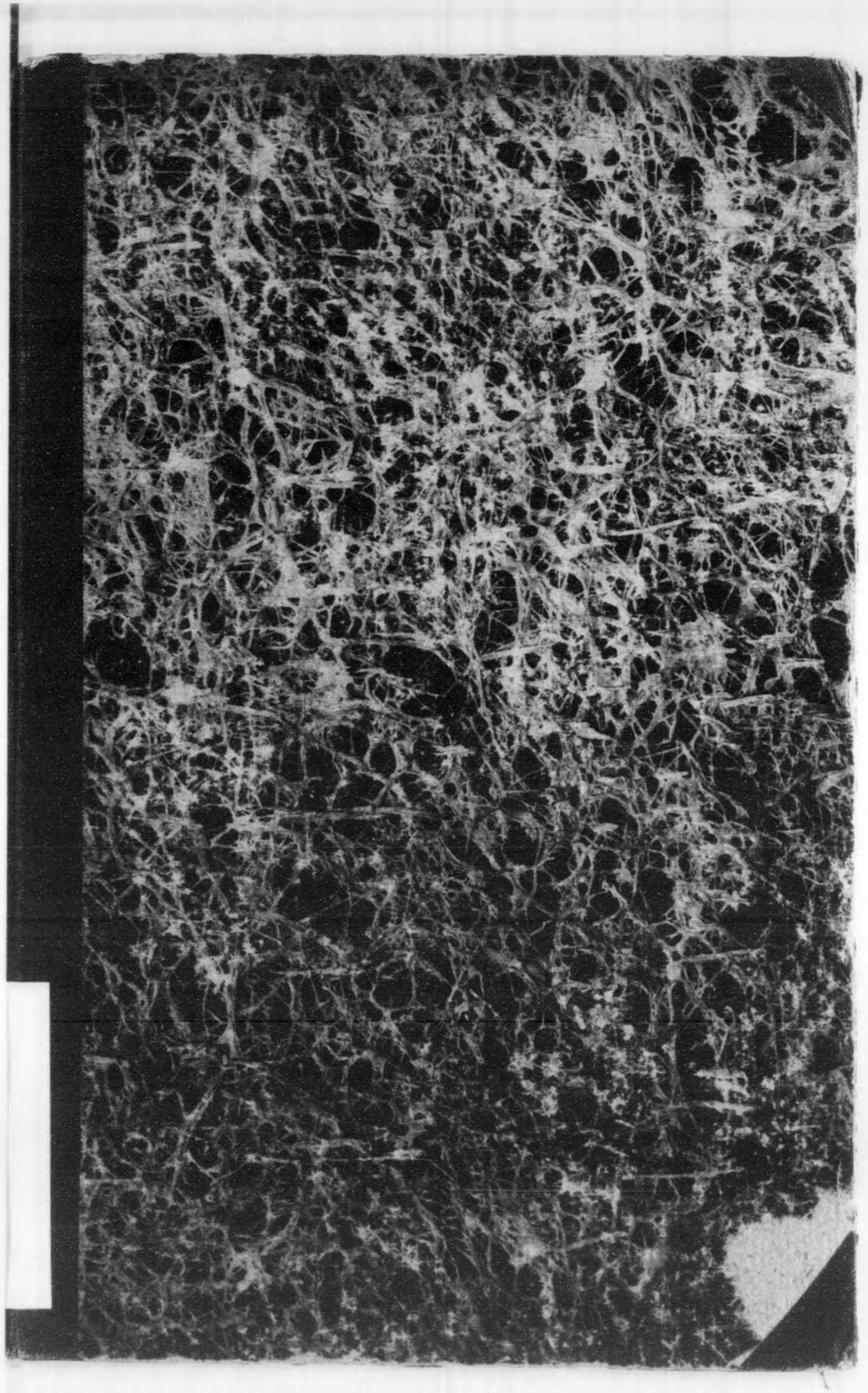
大正五年八月二十五日印刷
大正五年八月三十一日發行

著作兼發行者　長崎市小學校職員會

印刷者　富永官十郎
長崎市本博多町一番地

印刷所　重誠舍
長崎市本博多町一番地

327
7
912



終